

ちいさな証

今も生きているイエス様

脇山多恵子

スイス日本語福音キリスト教会



主の御名を心から賛美致します。

11月13日(月)午後3時頃、父が8月にコロナにかかり家に帰ることなく91歳で亡くなりました。

日本への里帰り一週間前に危篤という知らせが入り慌てましたが多くの方々のお祈りに主が応えてくださって一か月以上も父を生かして

てくださいました。

その後、日本へ行くことができても入院中の父に会うことはできなくて、一度だけリモートで父の顔を見ることができただけで3週間が過ぎました。点滴だけで生かされている状態で回復の見込みはなく、病院が家から遠かった事もあり、近くに移った方が良いのではないかとということで、ちょうど母がいる施設が許可してくれたおかげで生前の父に二度会うことができました。

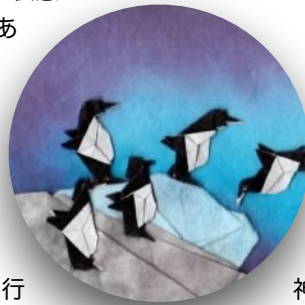
一度目は病院から施設へ移動した日で父の変わり果てた姿にショックを受け、その時父は朦朧として理解もできないようでした。そして二度目は九州に行く前日に、あと長くて3日~7日と聞かされて最後に主人と一緒に会いに行くことができました。酸素吸入をしている父の耳元で「お父さん、多恵子だよ、わかる？」って聞いたら深く頷いてくれました。それから父の足を二人でマッサージして父の手を取りお祈りしました。

「また会おうね」って言うとお別れをしましたが、父の目にはうっすらと涙がにじんで、何かを話そうと口を動かしてくれました。九州に行ってから毎日もう私達にはどうすることもできないから父に神様が直接語りかけてくださるようとお祈

りました。そして父は八日間生かされ静かに息を引き取りました。

最後の時には間に合いませんでしたが、死後、父は千葉の実家に二日間帰って来られたので、まるで眠っているように穏やかな表情を見ながら、一緒に過ごすことができました。神様の恵みにより日本滞在中に生きている父に会わせていただけてその上お葬式にまで参列することができて、すべてを益としてくださる主に心から感謝しています。

ただ父とこの世ではもう二度と会うことができないのだと思うと、心にポツカリと穴が開いてしまって、覚悟していたとはいえ、日本に行っても温かく迎えてくれる父がいないということが、これほど辛く悲しい事とは思いませんでした。ことあるごとに思い出しては涙があふれ、スイスに帰ってから大声でワソワソ泣きました。



お葬式の時、お坊さんのお経を聞きながら、心の中はこんな心のこもっていない、ただ本を読んでいるだけの式は、なんて虚しいのかと覚めた思いで参列しその中であって父も「俺は今生きているよ」って言って、笑って見ているような気がしました。父の意識が朦朧としている時、きっと神様が語りかけ、直接父を導いてくださったのだと、

父の安らかな顔を見て思いました。何もできなかった娘で後悔ばかりが残りますが、父のことを通して、なおさら福音を語ることの大切さを思わされています。

自分がまだこうして生かされているのは、一人でも多くの方に、唯一絶対の創造主であられるお方がどんなに人を愛し、素晴らしいお方であるのかを知らせるためだと確信しているので、今も生きてイエス様という救いの道を用意し、働いてくださっている神様を崇め褒め称えつつ、最後まで従い続けていきたいと思ひます。

